大地と生命

小林　道憲

大地と生命

小林　道憲

（日本の哲学者）

宗教は、大いなるものへの畏怖と帰一の感情である。この論文では、この大いなるものの一つに〈大地〉を考え、大地における〈生命の循環と永遠〉の信仰が、古代宗教の地母神にまつわる神話の中に語り尽されていることを論じている。〈母なる大地〉という観念は、先史時代以来、あらゆる宗教の低層流に連綿として流れていた感性の表現だったのである。

1　生　成

生成の原母

かつて、どの文明においても、その文明が生い立ってきた原初には、ほとんど例外なく、大地を母とし、それを一個の女神として崇拝する信仰があった。人間が大地に立った当初から、人間にとって、大地は生きとし生けるものを生み出す源泉と観念された。人間がまだ山野に野獣や木の実を求め、川や海に魚介を捕って生きてきたころから、大地はさまざまな恵みを生み出してくれる源であった。大地は、そこから多種多様な草や木を繁らせ、さらに、そこに多くの動物を住まわせる土台であった。大地は、無限の産出力であり、あらゆる生命とその豊穣の源泉であり、それ自身が無尽蔵な生命体であり、生成そのものであった。とすれば、これが万物を生み養う偉大な母と観念されたのも不思議ではない。母性の出産能力と、大地の産出力が結合され、大地が多産の女性像によって象徴されたのである。

ヘシオドスの『神統記』によれば、古代ギリシアでも、大地は広い胸をもった女神ガイアとして崇拝され、万物の生成の原理、カオスから生まれた最初の神とみられた。したがって、ガイア自身、万物を生み出す生命の源泉とも考えられた。現に、ガイアは、処女生殖によって、天ウラノスと海ポントスと高い山々を生む。また、天ウラノスや海ポントスや地底タルタロスとの結婚によって、ティタンやキュクロプスという神々や巨人、海の神や怪物たちを生み続けた。次々に生んでいくこの生成の力こそ、大地の本質であった。

さらに、ウラノスがキュクロプスや怪物たちを地底に幽閉してしまった時、ガイアがその子クロノスの力を借りてこれを助け出そうとしたところには、ガイアの母性原理が働き出ている。また、クロノスが、同様に兄弟のキュクロプスや怪物たちを冥界のタルタロスに閉じ込めたり、さらに、姉レアとの間に生まれた子供たちを次々と呑み込んでしまった

時も、ガイアは、レアの生んだ最後の子ゼウスを策略を用いて救い出そうとしている。ここにも、同じ大地の母性原理が働き出ている。また、クロノスとゼウスたちの十年にわたる長い戦争の結果、勝利を収めたゼウスが、同じように父クロノスやティタンたちをタルタロスに幽閉してしまった時も、ガイアはこれをとがめている。これも同様の原理によっている。ガイアが奇蹟の植物を生み、その汁で巨人のギガスたちに不死の命と無敵の力を与え、ゼウスに反旗を翻させようとしたのも、母なる大地の無尽蔵な生成力、無限の産出力、永遠の生命を象徴している。大地は、生み出すものであり、育むものであり、守るものであり、したがって、それは母なるものと観念されたのである。

天と地の結婚

ウラノスとガイアの結婚から様々のものが生み出されてきたように、天と地の結婚から万物が生み出されるという観念は、世界の多くの神話に見られる。日本神話のイザナキ・イザナミ二神の島生みの物語は、この天父と地母の聖婚譚の一つである。

イザナキ・イザナミ二神は、天の沼矛で下界を掻き回し、矛の先からしたたる海水が積もってできた島、淤能碁呂島に天降りして、互に交わって、日本の多くの島々を生む。さらに、石や土、海や河口、風や木、山や野、最後に火の神など、多くの神々を生む。イザナミは、また、聖婚によってばかりでなく、火の神を生んで御陰が焼かれて病気になってからも、金属や土器、水や生産に関する神々を生み続ける。それに対して、イザナキは、火の神を切った剣から日や雷の神を生み、さらに黄泉の国から帰って禊をし、日神や月神など天空にかかわる多くの神々を生んでいる。イザナキは父なる天の神、天父神であり、イザナミは、無尽蔵に万物を生み出す生成の原母であり、母なる大地の女神、地母神であった。

古代インドの最古の聖なる讃歌を集めた聖典、『リグ・ヴェーダ』（一・一六〇）に出てくるディヤウスとプリティヴィーも、通常、ディヤーヴァープリティヴィー（天地二神）と両数の形で表現されるように、インドの多くの神々の父母である。ディヤウスは天や日を表わし、多くの神々の父と言われ、牡牛によって象徴される。プリティヴィーは大地を表わし、神々の母であり、牝牛によって象徴される。両神とも老いることなく、常に美しく、一切の存在の親としてあらゆるものを保護し、豊富な栄養を生み、限りない恩恵を与える。プリティヴィーに捧げられた讃歌（五・八四）でも、大地女神プリティヴィーは、山々を担い、樹木を支え、豊穣をもたらすものとして讃えられている。

古代ギリシアのクロノスとレア、ゼウスとヘラの結婚による諸神の誕生という物語も、ウラノスとガイアの天地二神の聖婚譚を原型として出てきた物語であり、その模倣と反復と考えられる。レアもヘラも、もとは地母神であった。なかでも、レアはクレタの太女神であり、エーゲ海の宇宙の母であった。

天父と地母の聖婚による万物の生成という観念は、世界中の至るところで、文明の発生期には見られる観念である。この原初的観念には、万物が生成してくるには、天地が分離

する以前の宇宙の偉大な力が必要だという想念があった。それを、古代の人々は、天なる男神と地なる女神の結婚という観念で象徴したのである。人間の男女や動物の雌雄の結合による生殖という行為も、この天父と地母の聖婚による万物の生成という原型を模倣するものだと考えられた。

太古、人間が大自然の中で暮していた頃、天から日光が射し込み、雨が降ると、草木は芽を出し、生長し生い茂り、虫たちは蠢き、獣が駆け巡り、人間に豊富な恵みを与えた。大地は、これら多くの生き物を生み出す源泉であり、母胎と考えられた。ただ、大地がそれらを無尽蔵に生み出すにも、天からの光や雨を必要とした。それが、天父と地母の聖婚という観念によって象徴されたのである。実際、天からの雨は、地母を受胎させる天父の精液とも考えられていた。

太古の人々にとって、大地は、何よりも、そこからあらゆる生命体の生成してくる場であり、そこに万物が根を下ろす土台であり、そこを通して宇宙の無限の生命力が無尽蔵に発現してくる源泉であった。それは、あらゆる生き物の生死を超えた永遠性をもっていた。この永遠の生きた大地が、神として、しかも、偉大な母神として崇拝されたのである。人間はこの大地にしっかり根を下ろし、この大地を通して宇宙の根源的生命につながっていた。

太古の人々が大地を通して予感していたこの宇宙の根源的生命力こそ、精神と物質の一つになるところであり、そこから精神と物質が分かれ出てくる根源である。したがって、精神と物質は別々のものではなく、われわれの身体がそうであるように、精神の中にこそ物質があり、物質の中にこそ精神があるのでなければならない。物質も決して死んだものではなく、生きたものであり、この中に魂と生命力を宿しているものと考えなければならない。太古の人間は、生命の源泉としての母なる大地を通して、このことを把握していた。

2　豊　穣

狩猟時代の豊穣神

大地が、植物や動物や人間など生きとし生けるものの産みの母であり、生成そのものの原母であるという信仰は、人類の歴史の中でも最も古い層に属し、すでに旧石器時代に始まる。旧石器時代後期の遺物として出土する裸体の女神像は、母なる大地の神、地母神を表わすものであろう。それが、新石器時代になると、野や山の木の実や動物、川や海の魚介を恵む豊穣の女神として崇拝されるようになる。世界中に見られる新石器時代の大きなお尻とお腹をした女性の土偶は、そのような多産と豊穣を約束する女神であった。さらに、穀物の栽培が始まり、農業が開始されるに及んで、この豊穣女神への崇拝は一層盛んになる。母なる大地の神は、すべてのものを生み出す生成の原母であるばかりでなく、特に、穀物を育て稔らせ、豊かな収穫を約束する豊穣神となっていく。この豊穣神としての地母

神の祭祀は農耕文化の発展と併行して大きくなり、それとともに、様々な地母神の生活史が神話として語られるようになる。

山野を駆け巡り狩りを楽しむ古代ギリシアのアルテミスは、狩猟時代の面影を残す大地女神であった。大地は、草や木を生長させる産出力の源泉であるばかりでなく、山野を跋渉する動物たちを豊富に生み出す原母としても観念された。アルテミスが野生の動物の守護神とされたのは、そのためである。エペソスで崇拝された多くの乳房をもつ女神像がアルテミス像と考えられたのも、アルテミスがもと古代ギリシアの先住民の地母神であり、動物や人間の多産と出産を擁護する神であると考えられていたからであろう。

しかし、また、アルテミスは、狩猟と弓術を司る女神でもあり、お供の精霊、ニンフたちを連れて狩りを楽しんだという。野生動物の守護神が野生動物を殺す神になっているのは、一見矛盾した観念のようにも思われるが、必ずしも矛盾しているわけではない。多くの野生の動物を産出する大地神は、また、それゆえにこそ、多くの動物の生贄を要求すると想像されたのであろう。アルテミスは、これらの生贄を得ることによって、狩猟の豊穣や戦闘の成功を約束したのである。

アルテミスは、古代ギリシアでは、若き処女神と考えられ、純潔を守る女神とされていた。そのため、その職掌を侵害する者を厳しく罰する極めて残忍な面をも持ち合わせていた。巨人のティテュオスが母のレトを犯そうとした時、アルテミスは弟のアポロンと協力してティテュオスを弓で射殺し、地獄のタルタロスへ落として、禿鷹に肝臓を食わせる永遠の罰を与えた。また、二人しか子をもたない母レトを侮った子沢山のニオベを罰するために、アポロンと一緒に、ニオベの子供たちのほとんどを弓で射殺した。また、アルテミスの沐浴する姿を見たアクタイオンは、鹿に姿を変えられ、彼の猟犬の餌食となってしまったという。このようなアルテミスの物語は、アルテミスが狩猟時代の地母神であったことから想像されたのであろう。

もとは小アジアのプリュギアの女神であったキュベレも、アルテミスと同様、狩猟時代の面影を残す地母神であった。キュベレは、子供たちと野生動物の守護者であり、ギリシアでは神々の母レアと同一視され、母なる大地を象徴した。

ゼウスの精液から生まれた両性具有の不思議な生き物に驚いた神々は、その男根を切除した。その生き物が生長してキュベレ女神となった。切除された男根の方は地に落ちてアーモンドの木となり、その実の一粒がサンガリオス河神の娘ナナの胎内に入り、男子アッティスが生まれる。アッティスはすぐに山中に捨てられたが、不思議にも牡山羊が乳を与え、美青年に成長した。キュベレは彼に恋した。大地女神キュベレは、その繁殖力と産出力を維持するには、自分のもとの片割れである若い愛人を必要としたのである。

だが、狩猟時代の大地女神は、アルテミスがそうであったように、極めて残酷な面をもっていた。現に、キュベレに冷淡であったアッティスは、彼女の激しい嫉妬によって発狂させられ、自らを去勢し死なねばならなかった。アッティスは、キュベレ女神への生贄とされたのである。だが、キュベレは自分の残酷さを悔い、アッティスの死体を決して腐ら

せないという約束をゼウスから取り付けた。葬られたアッティスの小指は動き続け、髪は伸び続けたという。

ギリシアでは怪物扱いを受けているメドゥサも、もとは異国の地母神であった。彼女は、顔は美しかったが、頬は死人のように青ざめ、額には苦痛の皺を刻み、唇は蛇のように薄く毒々しかった。髪の毛は一本一本毒蛇の姿になって、こめかみのあたりにとぐろを巻きながら、ひらひらと枝の出た舌を吐いていた。メドゥサは多くの怪物の母親であった。その目によって見られると、だれもが石に化してしまわねばならなかったという。ペルセウスは、長旅の末、このメドゥサの首を切って持ち帰り、アテナ女神に捧げ、悪玉を滅ぼした。

メドゥサは、ギリシアではゴルゴン（怪物）のひとりに数えられているが、もとはリビュアのアマゾン女人族の太女神であり、あらゆる神々の母であった。メドゥサの髪の毛が一本一本蛇の形をしているのも、強力な生命力と産出力を表わしている。蛇を伴う女神の像は、メドゥサばかりでなく、古代以来世界各地に伝えられているが、この蛇は男根の象徴でもあり、水の象徴でもあった。それは、大地女神を妊ませる霊力をもったものと考えられていたのである。

農耕時代の豊穣神

母なる大地への信仰は、農耕社会の登場とともに、麦や米その他の穀物を豊かに稔らせてくれる豊穣女神への崇拝という形をとって、より盛んになる。特に、穀物の栽培が始まると、その栽培に携わったであろう女性の力が大きくなり、母なる大地への信仰は、この強まった母性の力を反映するようになる。女性のもつ産出力と養育力が大地の生産力の観念と結びつく。こうして、母なる大地は、偉大な産出の霊力をもつ母神として、盛んに崇拝されるに至ったのである。大地は母であり、命を与えるものであった。

古代バビロニアのイシュタルの物語も、この豊穣女神の物語である。もっとも、イシュタルは、天の女王と言われているから、それ自身が直接、母なる大地の神とは必ずしも言えないかもしれない。しかし、このイシュタルの様々の職掌を考えれば、もとは母なる大地の神、地母神だったのであろう。もともと、イシュタルは、バビロニア人によって、この世界および人間をつくった母神として崇拝されていた。『イシュタル讃歌』でも、彼女は、すべての人間の生命を形づくった荘厳な世界の女王と讃えられている。

イシュタルは、また、次々に愛人をつくっては捨てていく極めて多淫な女神とされてもいる。その愛人の中でも、農業の神タンムーズは最も有名な神で、おそらくイシュタルの分身とみてよいであろう。現に、タンムーズは、人間どもに作物を作り、果物を栽培することを教えた。彼は、一年のある期間を、この地上に牧神や農業の神として生活し、愛人として、イシュタルの限り無い寵愛を受けている。その期間は、人間が飼育する羊は増え、耕作する麦は豊富に稔るという。イシュタルは、また、病気を治す神でもあり、瀕死の病人を生き長らえさせ、病を癒す神として讃えられている。

古代エジプトの太女神イシスも、地母神から発展した豊穣神のひとりである。冬になり、草や木が枯れ萎んでいっても、春になれば、大地は、再び草や穀物の芽を出させ、それらを育てあげる生命力をもっている。それと同じように、古代エジプトのイシスも、古代バビロニアのイシュタル同様、病人を治し、不死の命を与え、死者を復活させる生命力を備えたものと考えられた。イシスのイメージには、そのような生命力の根源としての母なる大地のイメージが重なっている。

テーベの町に来降したイシスは、病人を癒し、子供を慰撫し、夫のオシリスは、人民に農耕技術を教え、収穫を増やす工夫をした。その後、オシリスはエジプトの国王となったが、弟セトの策略で黒檀の箱の中へ閉じ込められ、ナイル川に捨てられてしまった。愛する夫を失ったイシスは、夫の柩を探し出すために、ナイル川の岸をあてどもなく放浪した。その漂泊の旅の中で、オシリスの柩がビブロスの王宮の柱になっていることを知る。ビブロスの王宮に着いたイシスは、王子の病気を見る間に治し、王子の乳母となった。そして、王子に不死の命を与えようとして火の上に乗せたが、妃が驚いて王子を助け出してしまったため、その子は普通の人間以上には生きられなくなってしまったという。その後、柱の中の柩を得たイシスは、夫の遺骸を守りながらエジプトに帰ったが、セトの探索が厳しく、イシスと夫の忘れ形見ホルスは、再び全国を彷徨しなければならなかった。その間に、オシリスの死骸は無残にも切り刻まれて、ナイル川へ投げ捨てられてしまっていた。イシスは、ホルスを抱えながら、幾年の辛苦の末、エジプト全国からバラバラの遺骸の部分部分を集めて回った。ところが、男根だけは見つからなかった。イシスは、オシリスの男根を粘土で作り、完全なものに復元し、ミイラにした。かくて、オシリスは、この世界ではなく、地下の世界、つまり冥界の王として復活したという。

イシスはもと、〈席〉あるいは〈玉座〉を意味し、エジプトの王は、このイシスの膝に座ることによって王権を獲得した。つまり、エジプトでは、大地の上に座り、大地に抱かれることが王権の条件だったのである。それによって、王は、大地の豊穣を約束する霊力を身につけることができたのである。

この母なる大地の女神イシスの崇拝は、その後地中海全域に広がり、紀元前後からは、古代ローマ世界に広範に広まった。四世紀には、キリスト教によって追放されたが、しかし、このイシス崇拝は形を変え、聖母マリア崇拝となってキリスト教の中に吸収されていった。イシスがわが子のホルスに授乳する姿を描いた肖像は、聖母マリアと幼児イエスの肖像の原型となった。聖母マリアが幼児イエスを連れてエジプトを彷徨し、様々な出来事に遭遇したという聖書外伝の記録は、イシスとホルスの漂泊譚を元にしている。マリアとイエス、イシスとホルスばかりでなく、各地に伝わる母子像は、人間が大地の子であり、大地に依存する無力な幼児であることを象徴している。

古代ギリシアのデメテルも、地母神から発展した豊穣女神であった。デメテル（demeter）という名前自身、母なる大地を意味しており、これは、何よりも、大地の生産力の守護神であり、穀物の豊穣を約束する女神であった。ガイアも無限の生産力を象徴する地母

神であったが、これはより古い大地神の面影を宿しているのに対して、デメテルは、農耕が盛んになってきてからの大地神であり、豊穣神であった。

デメテルは、人間の姿をして地上を彷徨し、親切に扱った者には収穫の恩恵を与え、不親切に扱った者には不作の罰を与えた。エレウシスに到着したデメテルは、ケレオス王一家の親切が身に染みて奉公を申し出、生まれて間もない王子デモポンの乳母になった。デメテルは、彼を不死にしようとして、昼は彼の体に香油を塗り、夜は火中に入れて育てたため、デモポンは急速に成長した。しかし、これを聞いた王妃メタネイラは、恐ろしさのあまり悲鳴をあげた。デメテルは腹を立て、子供を床に投げつけたという。この話は、古代エジプトのイシスの物語からの流れである。

かくて、デメテルは神としての本性を現わし、エレウシスの地に彼女を祀る神殿を建てることをケレオス王に命じ、秘儀を行なう方法を教えた。また、デメテルは、世界に豊穣の恵みを与えるために、彼女の恵みである穀物の穂をトリプトレモスに与え、これを人間に伝達させた。このトリプトレモスが旅を終えてエレウシスに帰ってきた時、王位をトリプトレモスに譲るようケレオスに命じたのも、デメテルであったという。少年トリプトレモスが豊穣を約束する王となりえたのも、母なる大地の力によってであったことになる。小麦の種を分け与えているトリプトレモスの乗る車が竜と蛇によって動かされているのは、そのためである。竜と蛇は大地の霊力の象徴であった。

トリプトレモスに農業技術を伝えたことからも分かるように、デメテルは農耕時代の豊穣女神であった。古代のギリシア人たちは、この女神の機嫌・不機嫌によって、大地の肥沃や不毛が支配され、穀物の豊作・不作が決定されると信じた。彼らは、年ごとに訪れる穀物の作・不作に、大地の活力の消長を感じていたのである。それゆえ、彼らは、この大地女神の機嫌をよくするために、様々の儀礼を行なった。エレウシスの祭りは、その最も大きなものであった。

スコットランドの夏の王アングスの妃ブライドも、豊穣女神のひとりであった。彼らは、多くの人々から、豊穣で幸福な日をもたらす神として敬愛されていた。美しく若いブライド姫は、冬の間、冬の女王ベーラの虜になっていた。しかし、春が近づくと、夏の王アングスの季節がやってくる。ブライド姫は、夢でアングスが助けに来てくれることを知り、嬉しさに思わず一滴の涙を落とすと、その場所に一本のスミレが咲き出たという。それから間もなく、ブライドと白馬にまたがったアングスが出会い、やがて森の中から仙女の群れが出てきて、二人を祝福した。仙女の女王が杖を振ると、今までのブライドの貧しい身なりは美しい着物に変わり、彼女の金髪には美しい春の花が飾られ、右手には金の穀物の絡んだ白い杖を持ち、左手には豊穣の角笛と呼ばれる金の角笛を持っていた。二人が仙女の宮殿から出て、アングスが呪文を唱え、ブライドが手を振ると、にわかに草は生長した。人々は、この王と王妃を誉め讃え、ものみな芽吹き生長する春がやってきたことを知った。そして、この春の最初の日をブライドの日と呼んだ。地上には太陽が輝き、花が咲き始め、穀物の種は蒔かれ、人々はブライドに豊作を祈ったという。

アイルランドのケルト族の伝えた神話に出てくる神々のうちでも、例えば、ダーナ女神やエスニャ女神は、豊穣を約束する母なる大地の神であった。ダーナ女神は、アイルランドのあらゆる神の母と呼ばれている。このダーナ女神を母とする神族は、光と知識の力の具現者と考えられ、地上を豊穣にし繁殖させるという観念と結びついて、広く信仰されていた。エスニャ女神も、ダーナ一族の娘であり、人間たちに激しい情熱を吹き込む愛の神であると同時に、豊穣を約束する大地神でもあった。エスニャは、その息子ゲラルド伯を産む時、たった一夜のうちに丘に豌豆をすっかり植えつけてしまったという。その丘は、〈エスニャの丘〉として、マンスターのグル湖の付近に今日も伝えられている。

古代インドの天父神ディヤウスと一対で呼ばれる大地母神プリティヴィーも、もちろん豊穣女神という資格を得ている。プリトゥ王が国を治めている時、恐ろしい飢饉が起こり、地上の人々は困窮してしまった。プリトゥは、プリティヴィーを追い詰めて、収穫を生み出させようとする。プリティヴィーは、破壊させてしまった穀物や野菜を彼女のミルクによって蘇生させることを約束した。それによって、今人々が食べている穀物や野菜が生まれたのだという。

穀物の母

デメテルがトリプトレモスに穀物の種を与えたと言われるように、また、プリティヴィーが人間世界に穀物を広めたと言われるように、豊穣の大地女神は、また、穀物の母の役割をも果たす。わが国のオホゲツヒメやウケモチ、カムムスヒの神などは、そのような穀物の母という形をとった豊穣女神である。例えば、穀物の起源を語っているオホゲツヒメの物語は、大地の生産力への信頼を語って余すところがない。

下界へ降(くだ)ってきたスサノヲに食物を求められたオホゲツヒメは、鼻や口や尻からいろいろの物を出し、料理をして差し出す。その仕業を覗いたスサノヲは、汚いことをして食べさせると思い、ヒメを殺してしまう。殺されたオホゲツヒメの屍体の頭から蚕が、目から稲種が、耳から粟が、鼻から小豆が、陰部から麦が、尻から大豆が生まれてきた。これをカムムスヒの御祖(みおや)の命が取って種としたという。

この穀物の起源を物語るよく知られた死体化生(けしょう)説話は、人間と大自然の関係をよく物語っている。スサノヲから求められれば、それに応じて、次々と食物を無尽蔵に出してくるオホゲツヒメは、人間に種々の生きる糧を与えてくれる大地の恵みを象徴している。オホゲツヒメも、もとは母なる大地の神だったのであろう。このオホゲツヒメがスサノヲに殺されるという話は、人間が農耕を覚え、多くの穀物から豊かな食糧を得られたのは、大地の犠牲と恩恵あってのことであるということを反映するものであろう。この恵み豊かな大地への敬慕の念が、オホゲツヒメの死体化生説話には語られている。

ウケモチ神の物語も、同じ穀物の起源を語った死体化生説話であり、同様の思想を表現している。地上に降り立ったツクヨミがウケモチのもとに着くと、ウケモチは、首を巡らして、口から、国の方に向かって飯を出し、海に向かって鰭(はた)の広もの・鰭の狭(さ)もの（大小

の漁獲物）を出し、山に向かっては毛の麁もの・毛の柔もの（粗毛・柔毛の獣）を出し、そのくさぐさのものをすべて供えて御馳走した。ツクヨミは怒って、剣を抜いてウケモチを打ち殺してしまった。その屍体の頭からは牛と馬が化りいで、額からは粟が生まれ、眉の上には蚕が生まれ、目の中には稗が生まれ、腹の中には稲、陰部には麦と大小豆が生まれたという。

ウケモチは食べ物を主宰する神であり、やはり生産力の神であった。オホゲツヒメの物語にせよ、ウケモチの物語にせよ、そこには、大地の犠牲によってのみ人間は豊かな糧を得ているという思想が語られている。いずれも、母なる大地の無限の生産力への畏敬の念を語っている。母なる大地の犠牲こそ、豊かな収穫や生命の豊穣を約束してくれるものと信じられていたのである。

出雲系の神々とかかわりの深いカムムスヒの神も、万物の生命の母神という性格をもった生産神であった。カムムスヒは、八十神に殺されたオホアナムヂ（オホクニヌシ）を、その母神の願いで蘇生させている。カムムスヒは、死者を復活・再生させる力をもった生命を司る女神であった。カムムスヒは、また、オホゲツヒメの屍体から化生してきた穀物を取ってきて、それを種とした母神で、穀物の生成の役割をも果たしている。ムスヒという言葉が、すでに生産の霊力という意味である。それゆえ、カムムスヒは、蔓芋の種とも粟の種とも言われる小さな穀霊神スクナビコナの母でもあった。

オホクニヌシが出雲の御大の御前に来た時、波の上をやってくる神がいたが、名を名乗らないので、天下のことをすっかり知っている案山子の神クエビコに聞くと、「これはカムムスヒの神の御子で、スクナビコナの神です」と答える。カムムスヒの神も「まことにわたしの子であり、わたしの手の股からこぼれ落ちた子どもだ」と言い、「アシハラシコヲ（オホクニヌシ）と兄弟となって、この国を創り堅めよ」と命じたという。ここでは、カムムスヒは穀霊神の母となっており、生産力を象徴する神という性格をもっている。オホクニヌシがスクナビコナと二人で国土を創成できたのは、この農業の生産力によってであったことも、この説話から読み取ることができる。

穀母から穀霊神が生まれるという観念は、古代メキシコのアステカにも見られる。シペ・トテックは、トウモロコシの女神チコメコアトルの息子で、豊穣をもたらす穀霊神であった。だが、この神は、人間の生皮を身にまとった姿で現われ、毎年の豊穣をもたらす見返りに多くの生贄を要求した。そのため、毎年春に行なわれていたシペ・トテックの祭りでは、生贄の心臓を抉り、生皮を剥いで、その生皮を司祭が身にまとう儀式があったという。皮をまとった司祭はトウモロコシの女神の息子であり、穀霊神シペ・トテックの再生を意味する。トウモロコシは発芽するときも殻を破って出てこなければならないし、取り入れるときも皮をむかねばならなかった。この豊穣祈願祭は、それを象徴するものだったのであろう。

愛の神

一方、母なる大地の神は、多くの男神と交わってその産出力を発揮したとも観念されたから、地母神は、また、愛の神という形もとった。古代ギリシアのアフロディテはその代表である。

アフロディテは豊穣と美と愛の女神であり、多くの神々に恋をさせる力をもっていた。ヘシオドスによれば、アフロディテは、クロノスがウラノスの男根を切って海へ投げた時、そのまわりに集まった精液の泡から生まれたという。ホメロスによれば、愛欲を司るアフロディテは、極めて淫乱な女とみなされていた。彼女は戦争の神アレスと裸で抱き合っているところを、夫で鍛冶師のヘパイストスに見つけられ、目に見えない網でベッドごととらえられたが、海神ポセイドンのとりなしで二人は救われる。アレスとの間には、ディモス（恐怖）、ポボス（狼狽）、ハルモニア（調和）など、何人かの子が生まれたという。アフロディテは他の男神とも多く交わり、酒と陶酔の神ディオニュソスとの間には巨大な男根をもつプリアポス、ポセイドンとの間にはエリュクス、伝令使ヘルメスとの間に男女両性のヘルマプロディトスが生まれた。彼女は、また、多くの人間とも情交を結んだが、特に美少年アドニスとの愛はよく知られている。アドニスが野猪に突かれて死んだ時、悲しんだアフロディテは、少年の流した鮮血から赤いアネモネの花を咲かせたという。

アフロディテにとってのアドニスは、古代バビロニアのイシュタルにとってのタンムーズに当たる。アドニスやタンムーズは植物や作物の神であって、大地のもとで死して再生する神と考えられた。タンムーズと交わるイシュタルも、アドニスと交わるアフロディテも、ともに大地女神であり、同時に多淫な愛の女神と思われていたのである。

よく知られた北欧の女神フレイアも、美と愛を司る豊穣神であった。夫オズルが旅に出てしまったため嘆き続けたフレイアは、ついに、夫を探すため、数匹の猫が引く車に乗って、あてもない旅に出る。猫はフレイアが最も愛好した動物で、媚愛と肉感と多産の象徴であった。どこでもオズルを見つけることができず、行く先々で流した涙は、各地の地底にある黄金となった。南の国に入った時、ようやく出会った二人は、手に手を取って、神々の世界アスガルズに帰ることになる。フレイアの足取りは軽く、一足ごとに大地の草が緑となり、木々が花をつけ、鳥も喜びの歌を歌ったという。フレイアは、愛の神であると同時に、もともと大地の豊穣を具現する豊穣神だったのである。

インドのパールヴァティーも、ヒマラヤの神の娘ウマーと同様、地母神から発展してきた愛の女神である。パールヴァティーとは山の娘の意味で、ウマーと同じく、シヴァの神妃であった。パールヴァティーは、修行に夢中になって彼女に気づきもしない夫に、我慢ができなくなる。愛欲の神カーマデーヴァが、彼女に注目させようと、シヴァ神にキューピッドの弓を放した時も、シヴァ神は、額の第三の目から出る閃光によって、カーマを焼き殺した。パールヴァティーは、無限に継続するシヴァ神の修行に飽き、隠遁してしまった。ある日、若いバラモン僧が訪ねてきて、彼女を俗世間に連れ戻すために、シヴァ神の悪口を言った。しかし、パールヴァティーはシヴァ神を信じて疑わなかったので、バラモン僧はシヴァ神の本体を現わし、彼女の愛を求めた。二人はヒマラヤのカイラーサ山に行

き、愛の生活を送ったという。

3　死

冥界訪問

春となれば、大地には草が生え、花が咲き、木は芽吹き、穀物は育ち、野山には獣が這いまわり、小鳥たちがさえずり、あらゆる生命が復活してくる。大地は、生きとし生けるものを生み出し育む生命の源泉であった。この大地の無尽蔵な生成力が、人間や動物の母の産出力と結合され、大地女神として想像された。

しかし、冬になれば、草花は枯れ、木々は葉を落とし、穀物も取り入れられ、野山の獣や鳥たちもねぐらに籠り、虫たちはその短い一生を終えて大地に帰る。大地は、また、あらゆる生命がそこへと帰り、そこへと死し、そこへと衰えていく懐でもあった。

かくて、あらゆる生命の源泉であり、無限の生成力の源と考えられた大地は、同時に、あらゆる生命がそこへと帰っていく死の場所とも考えられた。人間も、動物も、植物も大地から生まれ、そして大地に帰っていく。そのため、古（いにしえ）の人々は、地底に、生きとし生けるものが帰って安らう死の国、冥界があると想像した。無限の産出力を司っていた大地女神が、愛人や愛し子を訪ねて冥界を訪問したり、あるいは冥界へ移動したり、あるいは冥界の女王になったりするという神話や伝承が生まれてくるのは、そのためである。

古代バビロニアの大地女神イシュタルの冥界訪問の神話は、その代表である。この地方では、命あるものが枯死する季節は、冬ではなく夏であった。

イシュタルは、愛人タンムーズを失った時、来る日も来る日も嘆き悲しんでいた。地上の人間たちも、太陽の極熱が厳しい乾燥をもたらす時、タンムーズの哀悼を続けた。農業神タンムーズが冥界に連れ去られたため、地上では野原も牧場も枯れ、穀物は実を結ばなくなり、家畜の数も少なくなっていった。居ても立ってもいられなくなったイシュタルは、冥界へ降り立ち、七つの門を通過して、ようやくのことで冥界の女王エレシュキガルのもとに辿り着き、タンムーズを返してくれるよう頼む。だが、エレシュキガルは承知せず、逆に、侍従ナムタルに命じて、イシュタルを邪気で叩きのめした。イシュタル女神の死は大地の豊穣の終末を意味したから、地上の神々はあわてて相談し、人獅子アスシュナミルを遣わす。アスシュナミルは、イシュタルを解き放つべしという地上の大神の命令をエレシュキガルに伝え、エレシュキガルはそれにしぶしぶ従い、かくて、イシュタルに生命の水をふりかけ、地上に帰した。

このよく知られたイシュタルの冥界下りの神話は、シュメールの大地女神イナンナが、年に一度冥界下りをするという神話に源泉をもち、その後、古代ギリシアの神話、例えば、デメテルとペルセポネ、アフロディテとアドニスの話にも影響した農耕神話である。大地女神の冥界下りは、灼熱の太陽のもとで命あるものが枯渇する真夏の砂漠の風土を背景に

想像されたものであろう。

古代ギリシアの豊穣女神デメテルが、冥界の王にさらわれた娘ペルセポネを探すというよく知られた神話も、母なる大地の観念と死の観念とが深く結びついていることを示している。

シケリア島の森で花を摘んでいたペルセポネは、冥界の王ハデスに連れ去られ、冥界に着いてからも嘆き続け、食物に手を触れようともしなかった。母デメテルは、娘を探し求め、飲まず食わずでさまよい歩いた。娘が誘拐されたことを知り、半狂乱となった彼女は、裏切ったシケリアの地に旱魃と飢饉の災いを与えた。デメテルが神々との交わりを避け、エレウシスの神殿で過ごした間、大地は稔りをもたらさず、不毛となった。そのことを心配したゼウスは、ペルセポネが冥界で何も食べていなければ、彼女をデメテルのもとに帰すことにした。冥界で一度でも飲み食した者は、永遠にそこに留まらねばならない掟があったからである。ところが、ペルセポネは、ハデスが間際になって勧めたざくろの実を幾粒か食べていた。そこで、ゼウスの仲介で、彼女は、一年の三分の一は、ハデスの妻として冥界の女王となり、死と復讐を司り、後の三分の二は、デメテルのもとで暮らし、母とともに大地の豊かさを司ることになった。それゆえ、一年の三分の一の暑い夏には、大地は渇ききって不毛となり、後の三分の二の秋から初夏にかけては、麦が蒔かれ、生長し、取り入れが行なわれるようになったのだという。

デメテルとペルセポネは、母娘として、生命の産出、養育、保護という女性の原理によって深く結びついている。そのため、男としてのハデスは、この女性の深い結びつきから娘を奪う者と観念されたのである。デメテルがペルセポネを取り返したという観念は、この女性原理つまり産出力の回復を意味している。それゆえに、この回復によって穀物の豊穣が約束されたのである。

ペルセポネはデメテルの分身であり、その母と同じく、豊穣女神であった。そのため、デメテルやペルセポネが不機嫌で、食物を口にしなかった時には、大地は不毛だと考えられた。その豊穣女神ペルセポネが同時に冥界の女王ともなっているということは、無尽蔵な産出力をもった大地が、同時にあらゆる生命体を呑み込んでしまう力をももっているという観念を象徴している。

冥界移動

大地と死のイメージは、豊穣女神の冥界訪問という形ばかりでなく、すでにペルセポネの話にも表現されているように、女神そのものが冥界へ移動し、冥界の女王となるという形でも表現される。

古代エジプトの豊穣女神イシスも、冥界の王オシリスの妻として、冥界の女王となっている。イシスは、長い漂泊の末、夫オシリスを冥界の王として復活させ、その玉座の側に就く。死者の霊魂は、太陽神ラーの船に乗り、冥府（ツアト）の五つの国を経て、六番目のオシリスの法廷に出向き、地上で行なった行為を審判される。

わが国のイザナミも、多くの島々や神々を生んだところをみれば、明らかに、万物を無尽蔵に生み出す母なる大地の神であった。しかし、同時にまた、イザナミは、火の神カグツチを生んだために御陰が焼かれて死に、地下の黄泉の国の神ともなっている。

イザナキに帰ってくるように説得されたイザナミは、ギリシアのペルセポネと同様、黄泉の国の食物を食べてしまったので帰れないと言う。それでも、イザナミが黄泉神に相談してくる間、待ちきれなくなったイザナキは、見るなの禁に反して覗いてしまう。すると、イザナミの身体には蛆がわいて、身体の各部位に八種類の雷が出現していた。雷は、天と地を結んで雨をもたらし、大地に豊穣をもたらす神であった。大地の神イザナミの身体に雷が居座っていたのも、そのためである。

イザナミの恐ろしい姿を見て驚いて逃げ帰ったイザナキを、イザナミは追ってくる。そして、黄泉比良坂で、別離の言葉を交わした時、イザナミは、「わたしはあなたの国の人間を一日に千人殺してしまいます」と言う。かくて、イザナミは、黄泉津大神、冥界の女王として、死者の国に住むことになった。

ここでも、イザナミは、あらゆる生命を生み出す母なる大地の神であると同時に、それゆえにこそ、また、すべてのものに死をもたらす神ともなっている。生と死、生成と消滅は、大地を通して深く結びついていたのである。

冥界の女王

生きとし生けるものが大地から生まれ大地に帰るという信仰は、かなり古くからあった。命あるものを次々と生み出す大地女神が、同時に死者の世界の女王ともみられたのは、その表われである。大地の子宮は、死者の安住する所であり、休息する所であった。死とは、大地の母の懐に帰ることであり、母なる大地の胎内に回帰することであった。そのような観念は、死者の屍を集落近くの野や山に埋葬した頃以来の観念であった。それ以来、大地は死者が永遠に眠るところと考えられ、大地の女神はその死者の世界を支配する神と考えられたのである。古代インドの祭式集『アタルヴァ・ヴェーダ』（一二・一・一四）でも、「大地は母、われは大地の子、…… 汝より生まれし有情は汝に帰る……」と言われている。

大地は、生きとし生けるものすべてを呑み込んでしまう偉大な力と考えられていたから、大地女神は、また、人間や動物を次から次へと殺していく残忍な女神としても想像された。古代エジプトの大地女神ハトルはその例である。

自らの治世が長くなり、人間が次第に従わなくなったことを嘆いた天上の神ラーは、人間を滅ぼすため、自分の目をハトルの女神に変え、人間を次々と殺させた。ハトルは、国中を駆け回り、自分の仕事に熱中した。その有様をみたラーは後悔し、せめて生き残った人間だけでも助けてやりたいと思い、薬草と大麦と人間の血で作ったビールを用意し、復讐の女神ハトルが一日の殺戮を終えて休む場所へ置いた。ハトルは、それを喜んで飲むうちに、酔いがまわってきて、人間のことなど忘れてしまった。その時、ラーは、彼女に、

そろそろ帰るようにと声をかけ、引き取ってもらったという。

古代エジプトで、新年の第一日に、ビールを作ってハトルの女神に供え、人々が踊り明かす祭りがあったのは、このハトルの帰還を記念してのことであった。元日は、弱まっていた太陽の力が再び息吹き返してくる日であり、そこからやがて春が訪れ穀物が育つ境目の日であった。この日を境にして、人間の生命力も長い衰弱から甦ると考えられていたのである。人間の殺戮を事としたハトルの女神が帰って行くという空想は、そのような観念から生まれている。

冥界の神という側面が強調される古代ギリシアのヘカテも、もとは豊穣を司る小アジア由来の大地女神であった。ヘシオドスの『神統記』（四一――四五三）によれば、ヘカテは、ゼウスがいかなる神よりも崇拝する重要な女神であり、天、地、海にわたる支配権をもつという。ヘカテは、また、牛や山羊の群れを増やし、子供を養育する神で、ヘカテに祈る者には福運が訪れると言われる。しかし、同時に、ヘカテは、そのような地母神的性格をもっていたから、ペルセポネと同様、地下の冥界の女主人ともみられた。さらに、ヘカテは、この冥界から出てきて、闇夜を支配し、好んで墓地をさまよい、魔法と妖術を守護し、怪奇な事象を引き起こし、多くの者を滅ぼしたともいう。夜道を支配し、運命を司るとも考えられたヘカテは、アルテミスと同様、十字路の守護者とも考えられ、死者を地下に導く月の神ともみられていた。

北欧の冥界の女王であり死の神であるヘルには、もはや豊穣神の面影はなく、もっぱら地下の地獄を支配する女神となっている。ヘルは、最も邪悪な神ロキと悪の権化で女巨人アングルボダとの子であったから、様々な災いをなす邪悪な神と想念されている。ヘルは、氷のように冷たく、狼のように恐ろしい顔をして、体の半ばが鉛のように青白く、半ばが血のように真っ赤であった。神々の王者オーディンは、このヘルを、後の災厄とならないようにと、氷寒世界の底に押し込めた。だが、ヘルは、この地底で死人のための地獄をつくった。死人は、この地獄に達するために、悲惨な旅を続けねばならなかった。死人の中で邪（よこしま）な行ないをした者は、この地獄で、言いようのない苦しみを味わわされたという。冥界の女神ヘルは、時折、三脚の白い馬か箒（ほうき）に乗って、人間世界に出てくることがある。そして、大きな熊手を振り回して人間を掻き集め、地獄に連れ去る。ヘルは、地獄で死人を支配し、世界破滅の光景を夢見ながら、神々に復讐することのできる時を待っているという。

あらゆる生きとし生けるものを呑み込んでしまう大地の観念から、北欧の人々は、厳しく暗い風土を背景にして、たくましい想像力によって、おどろおどろしい地獄とその女王像を想像したのである。

スコットランドのベーラは、冥界の女王ではないが、地上の草や木や穀物すべてを枯らし、萎えさせ、不毛にしてしまう冬の女神であった。老婆の形をしていたベーラは、背丈は高く、一つ目で、視力は氷のように鋭く、鯖のようにめざとく、顔色は陰鬱で、どす黒い青色だった。ベーラは、世界の四つの赤い国に君臨していたが、支配の及ぶ期間は冬の

間だけで、春が訪れると、ものみな彼女に反抗するようになる。それでも、ベーラは、最後まで全力を尽くして、植物の生長を妨害した。冬の間中、虜にされていたブライド姫が、春近くになって自分の息子アングスに連れ去られていった時も、ベーラは、八人の醜い召使の鬼婆に後を追わせ、自らも嵐と霜で荒れ回り、魔法の槌で大地を打ち続け、土を氷結させようとした。そのため、国中に不幸と災害がもたらされ、羊や山羊や馬や牛が死んでいったという。

このように、冬の女神ベーラは、スコットランドの荒涼とした冬の気候を反映し、恐ろしい老婆として想像されているのだが、しかし、彼女も、もとは、大地の豊穣を司る女神だったと思われる。もともと、ベーラは、スコットランドのすべての神々の母と考えられていた。実際、ベーラの子孫には、光の精や海の精、緑の魔女など多くの種族が生まれ出ている。しかも、彼女は、何百年も生き続けて不死であったという。また、ベーラは、スコットランドの河や湖水、山や谷、島をつくったとも伝えられているところをみれば、大地を形成する造化神であったとも思われる。豊穣の女神ブライドやその夫で夏の王アングスは、むしろ、この大地女神ベーラの分身だったとも考えられる。豊穣の神がベーラから分かれ出てしまったために、その後のベーラは、不毛をもたらす醜い冬の女神に落ちぶれてしまったのであろう。そのように考えることができるとすれば、ここでも、生成・豊穣を司る大地女神が、同時に、すべてを呑み込み、枯れ、萎えさせてしまう不毛の女神になるという二重性が暗示されていることになる。

インドの大地女神カーリーも、血を好み殺戮を喜ぶ破壊神に転じている。カーリーは、ヒンドゥー教でも最有力の神で、第一の右手に血のついた剣を、第二の右手に三叉戟（さんさげき）を、第一の左手に切り取った生首を、第二の左手に血を受ける頭蓋骨を持ち、首には人頭をつないだ輪をかけた神像として表現されている。カーリーは、特に動物の血を好むと考えられたので、その祭りには、無数の山羊が首をはねられ、その血が犠牲として捧げられた。

恐ろしい破壊神として想像されているカーリー女神も、もとは、太女神から生まれ出てきた神であった。昔、シュムバとニシュムバという兄弟の魔神に支配されようとした神々は、太女神に助けを求めた。すると、太女神は、シヴァの神妃ドゥルガ（パールヴァティー）の姿をとって現われ、魔神の手下と戦った。この時、この女神の怒りの顔から恐ろしい顔をしたカーリーが生まれ、口を大きく開き、目を血走らせて、魔神たちと戦い、その首を取った。カーリーは、魔神たちの血から生まれた邪悪な神たちも大きな口で飲み込み、その血も飲み尽くして殺した。

カーリー自身もシヴァの神妃とみられているが、彼女は時間と黒色の女神とも考えられていた。ギリシアのクロノスと同様、すべてを呑み込んでしまう神と考えられたのも、そのためでもある。カーリーは、生きとし生けるものに命を与えると同時に、すべてのものに死と消滅をもたらす大地の母だったのである。

4　再生と循環

再　生

命あるものが大地から生まれ大地に帰るという〈生から死〉への方向は、また〈死から生〉、つまり大地に帰ったものが再び大地から生まれてくるという再生の思想へと発展していく。

冬が来て、大地のもとに萎え枯れていった草も、春になれば、芽を吹き、花をつける。すっかり葉を落とし、死んだかに見えた樹木も、春になれば、若々しい緑の葉をつけ、繁茂する。秋になって刈り取られた穀物も、種となって冬を越し、春に蒔けば、田畑から再び芽を出し、豊かに実をつける。野山の木々の下に生息する虫たちも、冬の訪れとともに死し、死骸を大地の中に埋め、土くれとなって消えていくが、虫たちの生んだ卵は、長い冬籠もりの後、草花の芽吹きとともに再び生まれ出てくる。

これら植物や動物の死と再生を司っている四季の移り変わりも、いわば太陽の死と再生によってもたらされる。十二月、冬至の日、太陽の力は最も弱くなり、太陽は大地の果てに沈んでいくが、しかし、この日は再び太陽が甦ってくる日でもある。古来、この太陽の再生を祈って、多くの祭りが行なわれてきた。

大地は、生きものが死し、死したものがそこから再生してくる場であり、母胎であった。生とは大地の胎内を離れることであり、死とは大地の胎内へ帰ることである。とすれば、その大地の胎内から、再び命あるものが生まれ出てくると太古の人々が考えたのも、不思議なことではない。

インドのヒンドゥー教の考え方でも、世界は創造と破壊、死と再生を繰り返すものと考えられていた。生なくして死はない。死なくして生はない。だからこそ、シヴァ神にしても、カーリー女神にしても、徹底的にこの世のものを破壊する強大な力と考えられていると同時に、あらゆるものを生み出す偉大な力でもあった。破壊は同時に再生につながる。大自然は、暴風雨や洪水、旱魃や地震などによって、人間に災厄と破壊をもたらすとともに、植物を育て、穀物の豊穣を約束し、山野の動物を繁殖させてもくれる。大地は、災厄や破壊をもたらすと同時に、恩恵と創造の偉大な力でもある。インドの神々の観念には、この大自然の相反する二重性が反映している。大地は、死と再生、破壊と創造を繰り返し、かくて永遠の生命を維持する偉大な原動力と考えられていたのである。

古代バビロニアの太女神イシュタルが、死んだ愛人タンムーズを求めて冥界に下り、彼を連れ帰ったという話も、大地の生命力の死と再生を象徴している。イシュタルがタンムーズを求めて冥界に下った時には、地上では作物が稔らず、家畜も増えなかった。しかし、イシュタルがタンムーズを連れて地上に帰って来た時には、万物の生気は再び甦ったのである。このイシュタルの冥界下りからタンムーズの復活までを聖なる劇にして行なわれた儀礼は、新年祭に続いて行なわれ、タンムーズの復活する歓喜の日に大団円を迎えた。そ

して、これを境にして新年が始まった。古代バビロアの人々は、新年の始まる月（三〜四月）を、イシュタルとタンムーズが床を共にする月と考えた。この新しい月を境にして、草や木や穀物の生命力も甦ってくると考えられていたのである。

イシュタルとともに中東地方の最古の太女神のひとりに数えられるアスタルテは、古代フェニキアのビブロス出身の月の神であった。各地に残るアスタルテ像は、乳房を押さえたりあらわにしたりしているが、それは、乳房が生命の養育の象徴だったからである。シリアやエジプトでは、毎年十二月二十五日になると、アスタルテの聖なる劇を演ずることによって、天界の処女アスタルテから太陽神アドニスが再生してくるのを祝っていた。これは、冬至の祭りである。アドニスはアスタルテの息子でもあり同時に恋人でもあった。アドニスは冬の動物である猪に突かれて死ぬが、半年の間だけ地上に戻り、愛する人と一緒に過ごすことが許される。このアスタルテとアドニスの信仰は、レバノンからアレクサンドリア、アテナイからローマにまで広まり、特に、女性に人気があったという。彼女たちはアスタルテと自分を同一視し、アドニスのために泣き、アドニスの復活を喜び、祝った。聖母マリアが神の子イエスを産んだというキリスト教の言い伝えの原型の一つは、このアスタルテとアドニスの祭りにあると言われる。アドニスもイエス同様、不幸な最後を経て復活したのである。

古代ギリシアのエレウシスの祭儀は、豊穣神デメテルが娘のペルセポネを取り戻したことを記念するものであった。毎年秋に行なわれる本祭は、一日におよぶ行列で始まり、黄金時代の古式に則り、デメテルを祀る各聖堂に地域の産物を供え、巡礼していくものであった。さらに、ペルセポネの失踪と帰還の物語が、音楽と舞踊付きで演じられた。

小麦の種は、夏の間、暗い地中に埋められて保存され、秋になって蒔かれ、再び芽を出してくる。この穀物の死と再生が、ペルセポネの冥界への誘拐と冥界からの帰還の神話に象徴される。エレウシスの祭儀は、これを盛大に再現するものであった。この祭儀で行なわれる秘儀では、女神の再生にちなんだ儀礼が行なわれ、その儀礼への参加者の再生を約束した。人々は、この秘儀に参加することによって、自分たちが、そこへと死し、そこから再生する大地の子であることを体験したのである。

古代エジプトの大地女神イシスも、バラバラに斬り刻まれたオシリスの体の断片を集めて、夫を復活させている。「見よ、われ、汝がそこに横たわるを見つけたり、偉大なる者は力萎えたり、…… オシリスよ、汝、横たわりおる不幸なる者よ、立ち上がりて生きるべし、われはイシスなり」と唱えると、オシリスは立ち上がり、命を得て、イシスと交わり、かくて生命は途切れることなく続いたという。エジプトの人民に多くの知恵や技術を教えた英雄神オシリスも、母なる大地の女神イシスの力によって再生してきたのである。ここにも、大地のもとでこそ死したる者も再生し、かくて生命は永遠に続くという思想が反映している。

フィンランドの伝承『カレワラ』に出てくる放埒な自然児レミンカイネンも、母親の力で死から生へと甦っている。姿の見えなくなったレミンカイネンを、半狂乱になって尋ね

歩いた老母は、息子が冥界の黒い河水の底に死に絶えていることを知る。彼女は、名工イルマリネンに巨大な鉄の熊手を作ってもらって、はるばると死の河に赴き、その熊手でわが子を見つけ出すが、体の各部はバラバラになっていた。それをつなぎあわせ、生命の香油をわが子の体に塗りつけると、レミンカイネンは甦ったという。

わが国のオホクニヌシも、八十神たちに火で焼いた大きな石で殺された時、母神や女神の力で甦っている。オホクニヌシの死を悲しんだ母神が天上のカムムスヒに相談したところ、カムムスヒは、キサガヒヒメとウムガヒヒメを遣わして、オホクニヌシを生き返らせてくれた。キサガヒヒメが貝殻を掻きけずり、その粉を集め、ウムガヒヒメがこれを母の乳汁として塗ったという。オホクニヌシが、二度めに殺された時にも、母神が助け出して生き返らせ、スサノヲのいる根の堅州国に逃がしている。

レミンカイネンもオホクニヌシも、ともに、生命の香油や母の乳汁によって生き返っている。しかも、どちらも、母の配慮や、母の願いを聞いた女神の配慮によって復活している。それは、ガイアの生んだ奇蹟の食物の汁によって、巨人のギガスたちが不死の命を与えられたのと同じである。いずれも大地女神の再生力を象徴している。

また、レミンカイネンにしても、オホクニヌシにしても、種々の苦難に会って死し、そして復活している。これは、成年儀礼を反映したものであろう。成年儀礼は、少年の魂が死して、成年の魂へと再生する儀礼であった。ここにも、死と再生のテーマがある。この時いつも母神の助力があるのは、おそらく、大地に根差した女性の偉大な生命力に加護されなければ、英雄はその任務を全うできないという観念があったからであろう。

樹木と洞窟

命あるものは大地から生まれ大地に帰り、そして、また大地から再生してきて、かくて生命は永遠であるという思想は、多くの神話の中の死と再生の物語の中で語られるばかりでなく、古代世界では、樹木や洞窟などに託してもイメージされた。

樹木は、大地から生え出て生長し、大地に根を張って長い生命を保ち、枯れても、また次の世代の芽を出し、かくてその生命を維持させる。それは、大地における生命の永遠、死と再生を象徴するものであった。

北欧の古代人も、伝承された神話『エッダ』（グリームニルの歌　三一―三五）の中で、世界樹イグドラシルについて語っている。樹冠を高く掲げるこの聖なる木のもとには大地があり、三本の根は深く地底の冥界（ミズガルズ）に伸び、その根には生命の源であるミズガルズの蛇が無数にからんでいる。蛇も木も、死と再生の象徴であった。この聖なる樹木から、人々は絶えず啓示を受けていたのである。

ギリシア人も、デルポイでは、アポロンの月桂樹に助言を仰ぎ、ドドナでは、ゼウスのオーク樹に願をかけた。古代ケルトのドルイド教の神官たちも、オーク樹から神託を得ていた。

ヨーロッパのクリスマス・ツリーも、もとはキリスト教以前のゲルマン人の樹木に対す

る信仰に発している。太陽が死して復活する冬至に常緑樹を飾るのは、樹木が再生と永生の象徴だったからである。これが後、キリスト教と結合され、聖母マリアからのイエスの生誕を祝う木になっていったのである。また、十字架に架けられたイエスが死して復活したという信仰も、この樹木の信仰と深くつながっている。メイ・ツリー（五月の木）にも、同様な再生祈願の意味があった。

洞窟も、死と再生、そして生命の永遠の象徴であった。世界の各地で、太古に、洞窟が死体を埋葬する葬場に使われていたのも、そのためである。死者は、冥界の入口である洞窟の穴から、母なる大地の子宮に帰り、再びそこから再生してくるものと考えられた。

イエスが聖母マリアから生まれてきた場所は、ベツレヘムにある馬屋ではなく、洞窟であったという別の言い伝えがあるのは、キリスト教以前の古代信仰からきている。そこには、子供が、母なる大地から、処女精霊の子として、洞窟、つまり大地の子宮から生まれるという信仰があったのである。

循　環

大地には、何よりもまず草や木が生え、そこを獣たちが這い回り、この草木や獣とともに人間たちが生活している。しかも、これら大地から生まれ出てきたものは、また同じ大地に帰り、これを繰り返す。大地のもとでは、植物と動物と人間の間に、生命の連鎖があり、連帯性があった。大地の霊力、生命力は、大地から出て、あらゆる生きものの中を通って、大地に帰り、これが永遠に繰り返される。この生命の永遠回帰、永遠の循環こそ、原初の人々が信じて疑わなかったことであった。この世界に存在するものがどんなに変転しようとも、宇宙の目に見えない生命力は果てしない循環の中で保存される。

このような生命の永遠の循環の中では、時間も循環するものととらえられた。時間は、近代のように直線的に前へ前へと進むのではなく、ちょうど四季が移ろうように、あるいは月が満欠を繰り返すように、絶えず始源に回帰して再生し、円環を描くものと考えられた。去年村はずれで啼いて初夏の訪れを告げた郭公は、今年もまた同じように啼いて初夏の訪れを告げる。どの植物もいつも変わらぬ周期を描いて、忘れずに花を咲かせ、実を結ぶ。太陽も、冬至にせよ、夏至にせよ、いつの年も、同じ山の端から顔を出す。すべては繰り返し、回帰してくるのである。

ギリシアの時の神クロノスが、自分の生んだ子を呑み込んでしまったという神話も、時間の円環性を語っている。時は、創造する力も、すべてを無化する力をももっているからである。インドのカーリーが、創造女神であると同時に、すべてを破壊し呑み込んでしまう恐ろしい破壊神と想像されたのも、彼女が時の神でもあったからある。時はすべてを無化して、始源の混沌に帰し、そこから再びすべてを生み出す。カーリーは生成そのものであり、永遠の流動である。万物はそこから生まれて、そこへ消滅し、永遠の循環を繰り返す。ここでは、存在は生成に還元されている。生は死であり、死は生である。

大地女神の数多くの神話が語る生成・豊穣・死・再生・循環の物語は、宇宙の根源的生

命の再生と循環を象徴的に語りながら、宇宙生命の永遠を物語っている。われわれの死も、宇宙生命への回帰にほかならない。肉体も魂も、ともに死を通して宇宙生命へと帰還し、再生してくる。この宇宙の根源的生命への帰一の感情こそ、宗教がその発生以来求めてやまなかったものであった。

（出典 『小林道憲〈生命（いのち）の哲学〉コレクション』4 ミネルヴァ書房 2016 京都　所収『宗教とは何か』第二章）